

『増補俳諧歳時記菜草』 所引漢籍校読記 (3)

夏之部・秋之部

植 木 久 行

江戸末期の嘉永4年(1851)、藍亭青藍^{せいらん}は、曲亭(滝沢)馬琴撰『俳諧歳時記』を大幅に増補改訂した俳諧季寄、『増補俳諧歳時記菜草^{しりくさ}』を刊行した。この『菜草』は、解説の充実と検索の簡便さ(いろは順)から、明治・大正期、頻繁に刊行され、近年では堀切実校注『増補俳諧歳時記菜草』(岩波書店、岩波文庫、2000年8月・10月、2冊)がある。

本稿は、現在のところ最も優れる堀切実校注本を底本にして、その成果を参照しつつ、この代表的な江戸歳時記『菜草』に引かれて、季語・季題の解説等に用いられた漢籍を精読した校読記である。この『菜草』は、近現代の代表的な歳時記、改造社版『俳諧歳時記』(全5冊、1933年)の古書校注や、角川書店編『図説俳句大歳時記』(全5冊、1964~66年)の考証にも引用され、大きな影響力を持った歳時記である。この校訂作業を通して、歳時記(俳諧季寄)の解説に用いられた書籍の実態も、かなり明らかになる。

なお青藍が増補した解説中の漢籍は、ほとんどみな天明三年(1783)に刊行された三余斎^{そぶん}龐文撰『華実年浪草^{かじつとしなみくさ}』に基づいているが、本稿では、江戸俳諧季寄の季語・季題の解説に用いられた漢籍の具体相の把握を主眼としており、『菜草』に引く漢籍がほとんど『年浪草』からの孫引きであるとしても、江戸期の季語・季題の解説に用いられた漢籍であることには、少しも変わらないからである。なお『菜草』中に見える漢籍に対する簡略な解題は、『増補俳諧歳時記菜草』所引漢籍考(弘前大学人文学部『人文社会論叢』人文科学篇21号、2009年2月所収)のなかで発表した。

本稿は、『増補俳諧歳時記菜草』所引漢籍校読記 俳諧の字義・春の部(1) (『中国詩文論叢』第27集、2008年12月所収)、『増補俳諧歳時記菜草』所引漢籍校読記(2) 春之部・夏之部 (『人文社会論叢』人文科学篇第22号、2009年8月所収)の続篇である。

420頁 鼻羹^{けりのあつもの}、鼻炙^{けりのあひもの} 2つの「鼻」は、「臬」の誤りであろう。『年浪草』[- 21] や馬琴『歳時記』には、正しく「臬」字に作る。[漢史] 『漢書』巻25上、郊祀志上の如淳注と、『史記』巻12、孝武本紀の如淳注。ここは直接的には『(新編)古今事文類聚』前集巻9、羹臬鳥の条所引に拠る。3つの「鼻」は、「臬」の形訛。また「減ぜん」は「減せん」の形訛。

毛虫《陳蔵器曰》 唐の『本草拾遺』。ここは『本草綱目』巻39、雀糞^{じやくおう}の 積名 所引《蔵器曰》に拠る。「好で果樹…」以下は、同条の 集解 所引《蔵器曰》に拠る。「大小ともに蚕の如し」の原文は、「大小如蚕」。つまり「ともに」は衍字。この大小は大きさの意。「凝聚^{こりあつまつ}て硬く」は、本来「凝聚^{こりあつまつ}て漸く硬く」に作る。また「蚕の繭あるが如し」は「蚕の繭 [の中] にあるが如し」が妥

当。ちなみに麤の音は通常「よう」ではなく、「おう」である。

421頁 仏生会 [事文類聚仏運統記] 『(新編)古今事文類聚』前集巻9、浴仏の条所引「仏運統記」。

[浴仏功德経] 唐・宝思惟^{ほうしゆい}訳『仏説浴像功德経』。「滅度未来世」は「滅度後未来世」、「諸の衆生」は「諸の衆生等」、「仏を浴せん」は「像を浴せん」、「浴仏の法」は「浴像の法」、「香湯」は「香水」など、文字の異同がある。

422頁 [弥勒下生成仏経] 唐・義浄^{げしやう}訳『仏説弥勒下生成仏経』。

富貴草 [周茂叔愛蓮説] 北宋・周敦頤(字茂叔、号濂溪)撰『愛蓮の説』。『古文真宝』後集、説類所収。

[書言故事] 南宋末・胡繼宗の編、明・陳玩直の解『(京本音釈註解)書言故事大全』巻10、花木類。

423頁 不如帰 [格物論] 『古今合璧事類備要』別集巻68、「杜鵑附思帰楽」の条の「格物総論」。「樹に懸りて」は、本来「自ら樹に懸りて」、「謝豹思帰楽とよぶ」は「自ら謝豹思帰楽とよぶ」、「不如帰」は「不如帰去」に作る。

落^{ふき} [崔禹錫食経] 六朝?・崔禹錫^{さいうしやく}撰『食経』。『和名類聚抄』(20巻本)園菜類所引。「葵に似て…」は「葉は葵に似て…」が正しい。

424頁 蚊子木、蚊母草、蚊母鳥 [五雑俎] 『五雑俎』巻9、物部1の文は、かなり異なる。ここは『本草綱目』巻41、蜚虻^{ひぼう}の附録「蚊子」所引《蔵器曰》(唐の『本草拾遺』)に拠るだろう。『年浪草』[- 72]は、当該文を『和漢三才図会』より引く。『菜草』の引用ミスか。ちなみに馬琴『歳時記』は、「江東に蚊母鳥あり」以下の典拠を『本草』とする。

海蘿干^{ふのりほす}【本草】(【 】は引用書中に見える漢籍を表す。以下、同じ) 『本草綱目』巻28、鹿角菜の集解。

粉団^{いる}を射 [天宝遺事] 唐末・五代の王仁裕撰『開元天宝遺事』。明・陳耀文撰『天中記』巻5、端午の条所引『天宝遺事』に拠るか。文は少し異なる。「金盤中に釘^{くぎ}す」の釘は、「貯」の形訛。「織妙愛すべし」は、本来「小角を以て弓子を造る」の後にあり、小角弓の形容である。馬琴『歳時記』は『菜草』と同じ。

425頁 [歳時雑書] 『歳時雑記』(北宋・呂希哲撰)の誤り。『(新編)古今事文類聚』前集巻9所引に拠る。

428頁 腐草為螢 [月令] 『礼記』月令篇。《註》元・陳澧^{ちんこう}撰『礼記集説』。

風蘭 [潜確類書] 明末・陳仁錫^{ちんじんせき}纂輯『潜確居類書』巻97、蘭蕙の条の「風蘭」の項。

《名花譜に曰》明・西湖居易主人(姓名は未詳)撰『名花譜』(不分巻)「風蘭」の条。

433頁 鮠^{ごり} [崔禹錫食経] 崔禹錫^{さいうしやく}撰『食経』。『和名類聚抄』竜魚類所引。

「遊覧志」 『本草綱目』巻44、石首魚の集解 所引《田九成^{ママ}の遊覧志》。明・田汝成撰『西湖遊覧志』巻24、委巷叢談。「数里を綿直して」は、「数里を綿亘して」の形訛。綿亘^{めんこう}は長く連なるさま。

434頁 今年竹《時珍曰》 『本草綱目』巻37、竹の集解。「竹となると」まで。

葦の花 [本草綱目] 『本草綱目』巻21、地衣草の 集解 所引《大明曰》。北宋・大明^{だいめい} (号は日華子) 撰『日華子諸家本草』のこと。【大明、日華本草曰く】は【大明、日華本草に曰く】が穩当。

《時珍曰》 『本草綱目』巻21、石蕊^{せきすい}の 積名 。

【弘陶別録】 『本草綱目』巻21、玉柏の 集解 所引《別録曰》。弘陶は南朝梁・陶弘景の誤り。別録は『名医別録』(撰者不詳。後漢以来の名医の諸説を集めた医書)の略称。『本草綱目』序例・歴代諸家本草の条に、「梁の陶弘景、復た漢魏以下、名医の用ゐる所の薬365種を増し、これを名医別録と謂ふ」とあり、李時珍は陶弘景撰『神農本草經集注』と『名医別録』を混同していた。ちなみに『隋志』子部医方の条には、『名医別録』は陶弘景撰という。

【日華本草】 北宋・大明撰『日華子諸家本草』。ここは『本草綱目』巻21、桑花の 集解 所引《大明曰》に拠る。

435頁 黄雀風 [五雜俎] 『五雜俎』巻1、天部1。

極暑《梁元帝詩云》 詩は「書」(手紙)の誤り。明・彭大翼撰『山堂肆考』巻11、流金燂石^{しやく}の条に、「南史、梁元帝与武陵王書」として見える。南史は唐・李延寿撰『南史』巻53、武陵王紀伝を指す。同伝には「季夏」を「季月」に作る。唐・姚思廉奉勅撰『梁書』巻55、武陵王紀伝も「季月」に作る。

436頁 香薷散^{こうじゆさん}《時珍曰》 『本草綱目』巻14、香薷の 發明 。「香薷の元気を傷るを…」は、本来「暑の 元気を傷るを…」に作る。「薬に代て」は「茶に代て」の誤り。

香薷《宗奭曰》 『本草綱目』巻14、香薷の 集解 所引《宗奭曰》に拠る。北宋末の『本草衍義』の語。「花、紫にして辺^{ほとり}に…」は、本来「花茸は紫にして、辺に…」に作る。

金龜子^{こがねむし}【北戸録】 晚唐・段公路撰『北戸録』(嶺南の風土と産物の奇異を採録した書)。「粉に養ふ」まで。この『大和本草』(貝原益軒撰)巻14所引には、「本草^{ふしゆ}蟲の附録にのせたり」とあるように、『本草綱目』巻41、蟲の附録、「金龜子」の条所引に拠って、少し改めている。

442頁 天中節 [提要抄] 撰者未詳(宋代の作?)『提要録』の誤り。『山堂肆考』巻11、端午の条所引に拠るか。南宋末・陳元靚撰『歳時広記』巻21、^{ちん}天中の条にも見える。「午の剋」は本来「午の時」に作る。

天南星 [蘇頌図経] 『図経本草』。『本草綱目』巻17下、虎掌・天南星の 集解 。「兩岐相抱く」は、本来「兩枝相抱く」に作る。

《時珍曰》 『本草綱目』同条の 積名 。

444頁 天貺節^{てんげいのせつ} [書言故事] 『(京本音釈註解)書言故事大全』巻10、6月の条。「令要云」は「会要云」の誤り。『歳時広記』巻24、天貺節^{てんきやう}の条には、『国朝会要』に作る。「真宗祥符四年」は「真宗祥符四年」の形訛。「祥符四年」は「大中祥符四年」の略。

袷^{あはせ} [文選秋興賦] 梁・昭明太子蕭統撰『文選』巻13所収、西晋・潘岳「秋興の賦」。「御袷衣」は「袷衣を御す(着る)」。李善註の「袷衣無絮」(袷は衣に絮無し)は、『説文』(許慎『説文解字』[大徐本]巻8上、袷)の語として引かれる。

446頁 蜀葵^{あふひ}《時珍曰》 『本草綱目』巻14、蜀葵の 集解 。「冬月、また…」は、本来「冬月

宿根より、また…」に作る。

447頁 扇^{あふぎ} [五雜俎] 『五雜俎』 卷12、物部4。

汗衫^{あせとり} [釈名] 後漢末・劉熙撰『釈名』 卷5、釈衣服。ここは『初学記』 卷26、衫の条所引に抛るか。

暑^{あつさ} [山堂考索] 南宋・章如愚(号山堂)撰『山堂先生群書考索』 前集卷56、天文器類、同書卷57、天文類。ここは『潜確居類書』 卷4、歳時部・曆数(陰陽寒暑)所引に抛るだろう。「則日進で」は「則ち日進で」の意。「湿となり」は「温となり」の誤り。『菜草』は『年浪草』 [- 60] の誤りを襲う。

448頁 青山椒^{あやめ}【本草】 「秦椒は其…」以下は、『本草綱目』 卷32、秦椒の 集解。「蜀椒は釘(針の形訛)の如き…」以下は、『本草綱目』 卷32、蜀椒の 集解 所引《頌曰》(『図経本草』)に抛る。「枝の間に生ず」まで。なお「枝の間に生ず」は、本来「枝葉の間に生ず」に作る。

藜^{あかど} 《時珍曰》 『本草綱目』 卷27、灰藜^{てき}の 集解。「蔬とす」まで。「藜は灰藜…」以下は、同巻「藜」の 集解。なお「灰藜」は通常「灰藜」に作る。

449頁 菖蒲茸^{あやめふく} 《時珍曰》 『本草綱目』 卷19、菖蒲の 釈名。

451頁 菖蒲湯^{あやめざけ} [大戴礼] 『大戴礼』 夏小正篇。

452頁 菖蒲酒^{あやめざけ} [荆楚歳時記] 『荆楚歳時記』。ここは『潜確居類書』 卷5、蒲酒の条所引に抛る。「或は鏤め」は、「或は鏤み」と訓むべきであろう。

[本草] 『本草綱目』 卷19、菖蒲の 附方。厳密には「端午の日」以下である。

棟^{あかし}を佩、棟葺^{おぶ} [証類本草] 北宋・唐慎微撰『証類本草』。所謂『大観本草』では卷14、棟実の条の《陶隱居云》に見え、『本草綱目』では卷35上、棟の 集解 所引《弘景曰》に見える。「悪気を逐ふ」は、本来「悪を辟くと云ふ」に作る。陶隱居は南朝梁の陶弘景(自ら華陽隱居と号す)。

《時珍曰》 『本草綱目』 卷35上、棟の 釈名。【羅願が爾雅翼】 南宋初・羅願撰『爾雅翼』 卷9、棟の条。「棟と名く」まで。

棟の花 《蘇頌が曰》 『図経本草』。『本草綱目』 卷35上、棟の 集解 所引《頌曰》に抛る。

453頁 紫陽花^{あじさひ} [韻語陽秋] 南宋・葛立方撰『韻語陽秋』 卷16。白居易の「紫陽花」(『白氏文集』 卷20) 詩の題下自注に抛る。招賢寺は現在の浙江省杭州市にあった寺。

454頁 朝菊^{あさぎく}【救荒本草】 未詳。明初・周定王朱權撰『救荒本草』には見えない。

455頁 杏子^{あんず} [本草綱目] 『本草綱目』 卷29、杏の 集解。

荒布苳^{あらめかる}【本草綱目】 『本草綱目』 卷19、海帯の 集解 所引《禹錫曰》。北宋・掌禹錫・林億・蘇頌ら奉勅撰『嘉祐補注本草』の語。

458頁 暑日^{あつひ} [字彙釈文] 劉熙撰『釈名』(釈天)の誤り。『字彙』 辰集の「暑」には、「熱也」とあるのみ。

459頁 青田^{あせ} [杜詩] 杜甫の五言古詩「行官張望、補稻畦水歸」(行官の張望[人名]、稻畦の水を補ひて歸る) 詩中の2句。「杜詩詳注」 卷19などに所収。

麻、同苳^{ママ}【陸機草木疏】 三国・呉の陸機(げんかく)撰『毛詩草木鳥獸虫魚疏』 卷上、「可以漚紵^{ちよ}(以て紵を漚すべし、『毛詩』 [詩経] 陳風「東門之池」)の条。ただしそれとはかなり異なり、

ここは『本草綱目』巻15、苧麻の 集解 所引《頌曰》（『図経本草』）中に引かれるものを利用。「荊揚の間」は本来「荊揚の間」（長江中下流域）に作り、「諸国これを種て」は「諸園これを種て」の形訛。

460頁 《蘇頌曰》 『図経本草』。『本草綱目』巻15、苧麻の 集解 所引《頌曰》に拠る。

青瓜《時珍が青色瓜》 李時珍撰『本草綱目』巻33、甜瓜を指すか。『菜草』は『年浪草』[- 99] に拠る。

470頁 五月の鏡 [異聞集] 唐末・陳翰撰『異聞集』（唐代の伝奇小説を収録する選集）。『錦繡万花谷』（撰者未詳。南宋時代に編纂された類書）前集巻4、端午の条や、『(新編)古今事文類聚』続集巻28に引く『異聞集』（『異聞』）に拠るか。「揚州」「楊子江」は本来、「揚州」「揚子江」に作る。

[搜神記] 東晋・干宝撰『搜神記』巻13。ここは李時珍撰『本草綱目』巻5、「明水」所引に拠る。

《時珍、高臺録を引て云く》 『本草綱目』巻5、「明水」の 積名。「高臺録」は「高堂隆」の誤り。高堂隆は後漢末・三国魏の人。『三国志』巻25に本伝あり。『蓋銅を...』は「並びに銅を...」の誤り。

[五雜俎] 『五雜俎』巻12、物部4。「揚州」「楊子江」は本来、「揚州」「揚子江」に作る。

471頁 五月雨 [埤雅] 北宋・陸佃撰『埤雅』巻13、梅の条。「柱礎みな朽」は、本来「礎壁皆汗し」に作る。また「故に三月雨ふる」は、本来「故に江より以南三月雨ふる」に作る。馬琴『歳時記』にはあり、『菜草』が省略したもの。

[四時纂要] 唐末・五代の韓鄂撰『四時纂要』。本条は現存本に見えず、南宋末・陳元靓撰『歳時広記』巻2、黄梅雨の条所引に拠る。

472頁 柘榴の花 [潜確類書] 『潜確居類書』巻102、石榴の条。初めの「千葉」は「十葉」の形訛。

[博物志] 西晋・張華撰『博物志』。本条は通行本に見えず、『本草綱目』巻30、安石榴の 積名 所引に拠る。「塗に林安石国の榴の種を得て...」の原文は、「得塗林安石国榴種...」。従って「塗林・安石国の榴の種を得て...」が正しい。塗林は西域の国名（現在のイランのタウリア地方）である。

473頁 五月躑躅 [花史] ここは明・王路撰『花史左編』巻4、杜鵑花ではなく、むしろ明・周文華撰『汝南圃史』巻6、杜鵑の条に拠るだろう。「石巖花」は「石榴花」に作る。『菜草』は『年浪草』[- 52] に拠る。

【本草綱目】 『本草綱目』巻17下、羊躑躅の後に附す 附録、山躑躅の条。「按ずるに」の前まで。「蓮華躑躅の如くにして、石榴の花の如し」は、本来「羊躑躅の如くにして、蒂は石榴の花の如し」に作る。

474頁 五月間《李沈愁霖歌云》 『(新編)古今事文類聚』前集巻5、天道部・雨（古今文集）所収に拠る。ただし李沈は、晩唐の李沈（? ~ 895、字は東済）の形訛。また詩題「愁霖歌」は、北宋初の『文苑英華』巻331や『全唐詩』巻688には「秋霖歌」に作る。また『(新編)古今事文類聚』は2首其2とするが、『文苑英華』等に1首の七言古詩とするのが正しい。「葉破苔異未休滴、

膩光透長庭沙色、恨無長釵一千仞、割斷頑雲看晴碧」は、本来「葉破苔黃未休滴、膩光透長狂莎色。恨無長劍一千仞、割斷頑雲看晴碧」に作る。こちらの方が妥当。

476頁 三伏 [陰陽書] 初唐・呂才撰『陰陽書』。『初学記』巻4、伏日の条や『潜確居類書』巻5、歳時部・六月（三伏）の条所引に拠る。ちなみに本条は、清・馬国翰撰『玉函山房輯逸書』の中の唐・呂才撰『陰陽書』にも見える。

鯖釣《時珍曰》 『本草綱目』巻44、青魚の 釈名。「鮭魚」は「鱈魚」の形訛。

478頁 桐の花《時珍曰》 『本草綱目』巻35上、桐の 釈名・集解。「三月、花をひらく」は、本来「二月、花をひらく」に作る。

《宗爽曰》 北宋末・寇宗爽撰『本草衍義』。ここは『本草綱目』巻35上、梧桐の 集解 所引に拠る。「嫩葉、小花を開く」の原文は、「開嫩黃小花」。従って「嫩黃の小花を開く」に訂正すべし。

金柑の花《時珍曰》 『本草綱目』巻30、金橘の 集解。

枳殼の花《時珍曰》 『本草綱目』巻36、枳の 集解 所引《頌曰》（『図経本草』）。

479頁 木芍薬 [賈耽花譜] 唐・賈耽撰『百花譜』。ここは『潜確居類書』巻97、牡丹（木芍薬）の条に拠る。また清・陳元龍撰『格致鏡原』巻71、牡丹花の条にも見える。「紅紫」は「紅・紫」、「…の東沈香亭…」は「…の東、沈香亭…」の意。

《時珍曰》 『本草綱目』巻14、牡丹の 釈名。「宿幹木に似たり」の原文は、「宿幹似木」。従って「宿幹は木に似たり」と訓むべし。宿幹は旧幹の意。

羊蹄花《時珍曰》 『本草綱目』巻19、羊蹄の 集解。

480頁 儀方を書 [五雜俎] 『五雜俎』。未詳。巻2、天部2の、端午を記した条には、「書儀方也」（儀方を書くなり）の語しかない。ここは馬琴『歳時記』に拠る。

482頁 胡瓜《時珍曰》 『本草綱目』巻28、胡瓜の 釈名・集解。

【拾遺録】 唐初・杜宝撰『大業拾遺録』。『本草綱目』には「拾遺録」の前に「杜宝」の2字あり。大業は隋の煬帝の年号。

玉簪 [本草] 『本草綱目』巻17下、玉簪の 釈名・集解。

486頁 木耳取《時珍曰》 『本草綱目』巻28、木耳の 釈名。「湿熱の氣」は本来「湿熱の余氣」に作る。余は多の意。

487頁 鴨足草 [本草綱目] 『本草綱目』巻20、虎耳草の 集解。

內衣【温室 [経]】 後漢・安世高訳『仏説温室洗浴衆僧經』。『和名類聚抄』澡浴具・內衣の条所引。

【論語註】 『論語』郷党篇（「齊必有明衣、布」[齊には必ず明衣有り、布もてす]の条）。魏の何晏集解に引く前漢・孔安国注（『論語』[何晏集解]巻10、『論語集解義疏』巻5など）。

百合《時珍曰》 『本草綱目』巻27、百合の 釈名・集解。「百合、病を治す」の原文は、「專治百合病」。従って「（専ら）百合病を治す」に訂正すべし。百合病は一種の熱病の後遺症をいう。

488頁 白雨 [月令] 『礼記』月令篇（季夏之月）。

【山谷詩】 未詳。山谷は東坡の誤りか。北宋・蘇軾（東坡）の「六月二十七日望湖樓醉書」

詩の「黒雲翻墨未遮山、白雨跳珠乱入船」(黒雲 墨を翻して 未だ山を遮らず、白雨 珠を跳らして 乱れて船に入る)などを意識しよう。

【離騷註】 戦国・楚の屈原作「大司命」(九歌の一)の「凍雨をして塵に灑がしむ」に対して、宋・洪興祖撰『楚辞補注』巻2に引く《爾雅注云、今江東呼夏月暴雨為凍雨》を指す。屈原作「離騷」に対する注ではない。ちなみに爾雅注は、『爾雅』 秋天・風雨の条に見える東晋・郭璞注である。ここは『年浪草』[- 60]の誤りを襲う。(ただし離騷を、『楚辞』の別称に用いている可能性はある)

489頁 冥途の鳥 [十王経] 唐・藏川述『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』(中国で成立した偽経、あるいは日本での撰述か) 第一秦広王官。終わりの「...阿和薩迦とならん」は、「...阿和薩迦となかん(鳴かん)」の誤り。『菜草』は『年浪草』[- 45]に拠る。

490頁 蜜柑の花 [本草綱目] 『本草綱目』巻30、橘の 集解。

491頁 短夜 [月令広義] 『月令広義』巻10、五月令・節令。ただ「昼六十一刻三十分、夜三十八刻三十分」を、「昼五十九刻、夜四十一刻」に作る。

492頁 蚯蚓出 [月令] 『礼記』月令篇。

【本草綱目】 『本草綱目』巻42、蚯蚓の 積名。

《時珍曰》 『本草綱目』同条の 積名。「地龍子の名」は、本来「龍子の名」に作る。

海松 [崔禹錫食経] 六朝?崔禹錫撰『食経』。『和名類聚抄』海菜類・海松所引。

493頁 水鳥の巢 [字彙] 『字彙』午集、窠の条。

494頁 茗荷笋《蘇頌曰》 『本草綱目』巻15、蕻荷の 集解 所引《頌曰》(『図経本草』)。

496頁 薔藤《時珍曰》 『本草綱目』巻18上、苧実・牆藤の 積名。苧実はバラの実の名。牆藤はバラの茎・葉などの植物体を指す。「授て生ず」は「援て生ず」の形訛。

《又曰》 『本草綱目』同条の 集解。「小き葉尖り、薄く細なる齒...」は、「小き葉尖り薄く、細なる齒...」、「四出。黄心白色、粉紅の二色あり。」は「四出、黄心。白色・粉紅の二者あり。」が妥当。

497頁 茂り [元帝纂要] 『梁元帝纂要』。『初学記』巻3、夏などに引く。

櫻欄の花《時珍曰》 『本草綱目』巻35下、櫻欄の 集解。

芍薬《蘇頌曰》 『本草綱目』巻14、芍薬の 集解 所引《頌曰》(『図経本草』)。「春芽を生じ」は、本来「春 紅芽を生じ」、「一二尺」は「高さ一二尺」に作る。

《時珍曰》 『本草綱目』同条の 積名。

【董子曰】 戦国・董無心撰『董子』(1巻、2巻)。ここは『本草綱目』同条 積名 所引。「一名将離」までであろう。

498頁 蜀魂 [蜀王本紀] 前漢末・揚雄撰『蜀王本紀』。出処は未詳。北宋の『太平御覧』巻923、鶯の条所引『蜀王本紀』に類似した内容が見えるが、杜鵑を「子鵑」に作る。『菜草』は『年浪草』[- 43]に拠る。

謝豹 [五雜俎] 『五雜俎』巻9、物部1。

499頁 鹿の袋角 [本草云] 『本草綱目』巻51上、鹿の 發明 の《説曰》(『食療本草』[盛唐・

張鼎が初唐・孟詵撰『補養方』を補訂した書)。最後まで。

500頁 塩烏賊 [南越志] 南朝宋・沈懷遠撰『南越志』。ここは『本草綱目』巻44、烏賊魚の釈名 所引に拠る。「烏を嗜み」「飛鳥」「烏を賊害へば也」の鳥は、いずれも「烏」の誤り。『菜草』は『年浪草』[- 67] の誤りを襲う。

501頁 蕪菜 [潜確類書] 『潜確居類書』巻98、蕪の条。「短長。水に随て深淺あり」の原文は、「短長随水深淺」。従って「短長は水の深淺に随ふ」と訓むほうがよい。「蕪菜といふ」は、本来「絲蕪といふ」、「十月」は「九十月」に作る。この2点は『菜草』の引用ミス。『年浪草』[- 89] は正しい。また「漸く粗硬し」は、「漸く粗く硬し」と訓むべし。

紫蘇《時珍曰》 『本草綱目』巻14、蘇の 釈名。「紫と云は」は「紫蘇と云は」の誤り。『菜草』は『年浪草』[- 96] の誤りを襲う。

蟪蛄 [伝灯録] 北宋・道原撰『景德伝灯録』巻6、朗州中邑洪恩禅師の条。「巢を作る」は、本来「窠を作る」とある。『菜草』は『年浪草』[- 92] に拠る。「仰山洪恩禅師に問ふ」は「仰山 洪恩禅師に問ふ」の意。仰山は唐の慧寂を指す。

502頁 神水 [金門記] 撰者不詳(唐代の人)『金門歳節記』。『潜確居類書』巻29、水総(神水)の条所引『金門歳節記』や、『重較説郛』巻119に収める『雲仙雜記』(唐・馮贇撰)巻7の「竹節中神水」の条(出金門歳節)に、ほぼ同文が見える。『本草綱目』巻5、神水の 集解 所引『金門記』は、かなり異なっている。「竹を破れば」は「竹を斫れば」の形訛。『菜草』の引用ミス。『年浪草』[- 23] は正しい。

[紀曆撮要] 明・婁元礼撰『紀曆撮要』(『[新刻] 田家五行紀曆撮要』全1巻)。「今日」は本来「端午日」に作る。『菜草』は『年浪草』[- 23] に拠る。

503頁 賑給 [礼記月令] 『礼記』月令篇、季春の条に、「天子 徳を布き恵を行ひ、有司に命じて倉廩を発きて貧窮に賜ひ、乏絶を振ひ、府庫を開きて幣帛を出だし、天下に周くす」とある。これを指す。「貧窮の者給ふこと」は「貧窮の者に給ふこと」が妥当。

越瓜《時珍曰》 『本草綱目』巻28、越瓜の 釈名・集解。「菜花と呼ぶ」は「菜瓜と呼ぶ」の誤り。「三月」は本来「二三月」に作る。

504頁 神麩製 [本草] 主治 『本草綱目』巻25、神麩の 主治。「水穀、宿食」は「水穀の宿食」が穏当。水穀は水と穀物、広く食物を指す。

《時珍曰》 『本草綱目』同条の 主治。【葉氏水雲録】 宋・葉夢得撰『水雲録』。いま『本草綱目』巻1上、序例「引拠古今經史百家書目」による。「...汁を用ひて、麪豆・杏仁を...」は「...を用ひて、麪・豆・杏仁を...」が妥当(汁は衍字)。

506頁 溽暑 [月令] 『礼記』月令篇。《注に云》 元・陳澧撰『礼記集説』。

507頁 清水 [説文] 『初学記』巻6、総載水第一に見える『爾雅』の「水出山石間曰澗」(水山石の間に出づるを澗と曰ふ)に拠るか。「岩間に出るを澗といふ」は「山石」を誤って一字(岩)にし、冒頭の「水」字を脱したものであろう。『菜草』は『年浪草』[- 67] に拠る。『説文解字』には「澗」の字は見えず、字形の類似した澗(山石の間)の条(巻11下)には、「水生厓石間澗澗也」(水厓石[山の断崖の岩]の間に生じて澗澗なり)とあり、やや異なっている。

508頁 美人草 [名花譜] 明・西湖居易主人 (姓名は未詳) 撰『名花譜』(不分卷) 虞美人の条。

[古文前集] 曾子固が虞美人草の題注に云 北宋・曾鞏 (字子固) の「虞美人草」詩。題注は『魁本大字諸儒箋解古文真宝前集』七言古風短篇所収の当該詩の題下注。榊原篁洲『古文真宝前集諺解大成』などにも見える。《同く詩に云》 「虞美人草」詩中の句。

単物 [釈名] 後漢末・劉熙撰『釈名』釈衣服。ただし同条には、「禪衣言無裏也」(禪衣は裏無きを言ふなり) とあるが、『太平御覧』巻691、単衣の条所引『釈名』などには、禪衣を「単衣」に作る。(意味は同じ) ここは『釈名』からの直接引用ではなからう。

509頁 冷麦 [青箱雜記] 北宋・呉処厚撰『青箱雜記』。ただし通行本には見えない。『潜確居類書』巻96、餅 (湯餅) の条所引に拠る。南宋の類書 (撰者未詳) 『錦繡万花谷』前集巻36、饌食・湯餅の条などにも見える。「凡、麵を…」の凡は「およそ」と訓む。

510頁 蟾蜍 [蘇頌曰] 『本草綱目』巻42、蟾蜍の 集解 所引《頌曰》(『図経本草』)。「痲磊」は「痲磊」の形訛。

【抱朴子】 東晋の葛洪撰『抱朴子』内篇・仙薬篇。ここは『本草綱目』同条 集解 所引であり、原文とはかなり異なる。「腹の下の丹青」は「腹の下の丹書」(『抱朴子』には「腹」を顔に作る)。「茱草」は『年浪草』[- 111] の誤りを襲う。「肉芝と名づく」までか。

511頁 鬪百草 [劉公嘉話] 唐・韋絢撰『劉賓客嘉話録』。『錦繡万花谷』前集巻4、端午の条所引。「これを取らしむ」とは、南朝宋・謝靈運の鬚を指す。

《欧陽公鬪草詩云》 北宋・欧陽脩「端午帖子」中の「夫人閨五首」其2 (『文忠集』巻87所収)。五言詩であるため、「共鬪今朝勝盈…」は「共鬪今朝勝、盈…」が妥当。ここは『(新編)古今事文類聚』前集巻9、鬪草戯の条に見える「欧詩云」に拠るか。また明代の撰者未詳『円機活法』(明・王世貞校。『(新刻重校増補)円機活法詩学全書』)巻13、遊眺門・鬪草にも見える。「盈檐」は「盈檐」の形訛。檐は、まえかけ、まえだれの意。『茱草』の引用ミス。『年浪草』[- 18] は正しい。

未央柳 [園史] 未詳。明・周文華撰の園芸書『汝南園史』巻7、金糸桃の条は、本条の内容と重ならない。『茱草』は『年浪草』[- 54] に拠る。

姫百合《時珍曰》 『本草綱目』巻27、山丹の 集解。「根少にして」は「根小にして」の形訛。『茱草』は『年浪草』[- 57] の誤りを襲う。

菱の花《時珍曰》 『本草綱目』巻33、菱の 釈名・集解。「五月」は「五六月」。また「日に背きて昼合し、宵炕す」の原文は、「背日而生、昼合宵炕」。従って「日に背きて生じ、昼合し宵炕く」となる。ここの炕は合の反意語。『茱草』は『年浪草』[- 71] に拠る。「五月」は『茱草』の引用ミス。

512頁 穆蒔《時珍曰》 『本草綱目』巻23、穆子の 釈名・集解。

枇杷 [広志] 晋 (以後) ・郭義恭撰『広志』。『(新編)古今事文類聚』後集巻27、枇杷の条や、『太平御覧』巻971、枇杷の条所引に拠る。ちなみに本条は、清・馬国翰撰『玉函山房輯佚書』に収める『広志』下にも見える。

《一書に云》 ほぼ『本草綱目』巻30、枇杷の 集解 所引《頌曰》(『図経本草』)に見える。「隠密婆娑」は本来「陰密婆娑」、「黄梅の如し」は「(熟する時、色は) 黄杏の如し」に作る。『茱

草』は『年浪草』[- 77] に拠る。また「皮内甚だ薄く」は、「皮肉甚だ薄く」の形訛。

514頁 一夜酒 [本草綱目] 『本草綱目』 卷25、酒の 附諸酒方 の竹葉酒。

日盛《杜甫苦熱行》 『古文真宝前集』（榊原篁洲『古文真宝前集諺解大成』）行類には、唐の王穀「苦熱行」を収める。杜甫は晩唐の王穀の誤り。（『文苑英華』 卷210等も、王穀の作とする）『菜草』は『年浪草』[- 64] の誤りを襲う。ちなみに『潜確居類書』 卷5、歳時部・夏（祝融司方）の条には、晩唐・吳融「苦熱行」として見えるが、吳融は誤り。ちなみに詩中の「紅炉」は、通常「洪炉」に作る。

515頁 百日紅 [格物論] 『古今合璧事類備要』 別集卷31、紫薇花の 格物総論 。ちなみに別集は南宋・謝維新撰ではなく、南宋・虞載撰である。「怕痒花」の怕の音は、八が正しい。また苜の音は、シウではなく、ジョウである。

[三才図会] 明・王沂纂集、王思義続集『三才図会』 草木12。「搔くときは自ら動。」は、本来「搔くときは樹自ら動。」に作る。『菜草』は『年浪草』[- 75] に拠る。

鼓子花《時珍曰》 『本草綱目』 卷18上、旋花の 積名。「其花、瓣をなさず、状、軍中...のごとし」の原文は、「其花不作瓣状、如軍中...」。ここは「其花、瓣状をなさず、軍中...のごとし」のほうが穏当である。

516頁 未草《本草に、時珍曰》 『本草綱目』 卷19、萍蓬草の 集解。

【段公路、北戸録に云】 晩唐・段公路撰『北戸録』。『本草綱目』 同条所引。ここは「睡蓮あり」の部分のみ。「荷の如くして」は、本来「苻の如くして」に作る。

瓠花《時珍曰》 『本草綱目』 卷19、壺盧の 集解。本条最後まで、「其実一類」の其実は、ここでは2字で「じつは、実際は」の意。

【詩に云】 『詩経』 小雅「瓠葉」詩中の四言句。従って「幡幡瓠葉采...」は、「幡幡瓠葉、采...」のほうがよい。「要舟として水に浮ぶべく」の要は衍字として削るべきであろう。（劉衡如校点『本草綱目』 [人民衛生出版社、1986年再版] の説参照）

517頁 醬造《時珍曰》 『本草綱目』 卷25、醬の 積名。嚴密には「按ずるに」以下。

【劉熙が積名に云】 後漢末・劉熙撰『釈名』。通行本には見えない。

518頁 日向葵【花史】 明・王路撰『花史左編』 卷4、丈菊の条。「文菊」は「丈菊」の形訛であろう。貝原益軒『花譜』 下、七月「丈菊」の条参照。

521頁 藻荇、藻舟、藻の花《時珍曰》 『本草綱目』 卷19、水藻の 積名・集解。「水蘊」は「水蘊」の形訛。『菜草』の引用ミス。『年浪草』[- 70] は正しい。

522頁 千日紅 [花鏡] 清初・陳淚子（一名扶搖）撰『花鏡』（秘伝花鏡） 卷6、花草類攷・千日紅。「枝の抄に生ず」は、本来「枝の梢に生ず」に作る。

523頁 赤靈符 [抱朴子曰] 東晋・葛洪撰『抱朴子』 内篇・雜应篇。『芸文類聚』 卷4、五月五日など所引に拠るか。「兵をさくる」は、通常「五兵をさくる」に作る。『菜草』は『年浪草』[- 21] に拠る。

蟬 [格物論] 『古今合璧事類備要』 別集卷92、蟬の 格物総論。「以て鳴者也」まで。「啄長く...」は「喙長く...」の形訛。直接の典拠、『年浪草』[- 85] は、正しく喙に作る。また「腋の

下」は「腹の下」に作る。

石菖《時珍曰》 『本草綱目』 卷19、菖蒲の 集解。「按ずるに」以下は、『本草綱目』 同条の 發明。「根、匙の柄の如し。粗き者」の原文は、「根如匙柄粗者」。従って「根、匙の柄の如く粗き者」のほうが穩当。

【臞仙、神隱書云】 明・寧獻王朱權 (号は臞仙) 撰 『神隱 (書)』 卷上、草堂清興・蒲草の条。 526頁 涼し [風土記] 吳末・西晋の周処撰 『風土記』。『太平御覽』 卷22、時序部・夏中所引 に拠るか。「東南の風常にあり」の原文は、「東南常有風至」。従って「東南 常に風 (の至る) あり」が妥当。直接の典拠、『年浪草』 [- 60] には「至」の字なし。

馬齒莧《時珍曰》 『本草綱目』 卷27、馬齒莧の 釈名・集解。 528頁 李 [八閩通志] 食貨の部云 明・陳道の修、明・黃仲昭の纂輯 『八閩通志』 卷25、食貨、土産・福州菓之属。

529頁 涼臺 [開元遺事] 『開元天寶遺事』。ここは『 (新編) 古今事文類聚』 前集卷9、涼棚避暑の条所引 『開元遺事』 に拠る。通行本では「天寶遺事下」(結棚避暑) に属す。「同じく座せしめ」は、本来「間坐せしめ」に作る。

530頁 菅苺【本綱】 『本草綱目』 卷13、地筋の条。 蟪蛄《時珍曰》 『本草綱目』 卷41、蟪蛄の 集解。終りの「夏より秋」以下は、『本草綱目』 同条の 正誤 所引《葳器曰》(唐・陳葳器撰 『本草拾遺』) である。「蚕の如し。大さ」の原文は、「如蚕而大」。従って「蚕の如くして大きく」と訓むべし。

秋之部 (以下の頁は、堀切実校注本『増補俳諧歳時記菜草』[岩波文庫] 下冊の頁数)

7頁 秋 [漢書律曆志] 『漢書』 卷21上、律曆志上。「陰炁」の炁は氣の異体字。「物撃斂」は、本来「物黻斂」に作る。ちなみに「陰炁遷落物」とは、陰の氣が万物を衰落させる意。従って「遷」の訓「ウツリテ」は、「ウツシテ」の方が穩当であろう。

少皞 [礼月令] 『礼記』 月令篇 (孟秋之月)。《注云》 元・陳澧撰 『礼記集說』。

蓐收 [月令] 『礼記』 月令篇 (孟秋之月)。《注云》 『礼記集說』。

白蔵 [爾雅] 『爾雅』 釈天。《注云》 東晋・郭璞注。注中の「万物」は、通行の『爾雅』 注には見えない。ここは、明末・陳仁錫 (字明卿) 纂輯 『潜確居類書』 卷5、歳時部・秋 (白蔵) の条所引に拠る。

金商《唐高宗九日詩》 『全唐詩』 卷2 には、詩題を「九月九日」に作る。ちなみに玉厨は天子の御座の屏風、朝廷をいい、金商は秋の声 (秋は五行では金、五音では商に当たる) をいう。

明景 [元帝纂要] 『梁元帝纂要』。『初学記』 卷3、秋などに引かれる。「朗景」まで。「朗明、義同」は、『年浪草』 [- 2] の語。

爽籟 [増韻] 南宋初の毛晃・毛居正撰 『増修互注礼部韻略』 卷3、爽の条。

【爾雅】 通行の『爾雅』には見えない。南宋・祝穆撰 『 (新編) 古今事文類聚』 前集卷3、風の条に、「万物有声曰籟」とあり、典拠を「爾雅」と注する。これに拠るか。

夷則 [月令広義] 明・馮応京撰、明・戴任増釈 『月令広義』 卷14、七月令・事文の条。「夷傷

則法也」は、「夷傷、則法也」（夷は傷、則は法なり）の意。また「金氣始蕭」は、「金氣始肅」の形訛。

8頁 立秋 [月令広義] 『月令広義』巻14、七月令・節令の条。「大暑十五日」は、本来「大暑後十五日」に作る。《孝經緯》（撰者不詳。漢代の人が『孝經』に付会して作った緯書）は、「立秋」まで。「七月節」は『年浪草』[- 2]の語。

新秋 [韓文] 『韓文』（唐・韓愈撰。唐・李漢編。韓愈の詩文集。明・游居敬校）巻4に収める韓愈「豊陵行」詩の一節。

孟秋 [広韻] 北宋・陳彭年^{ほうねん}・邱雍ら奉勅撰『大宋重修広韻』。孟の字は巻4、始の字は巻3。

処暑 [月令広義] 『月令広義』巻14、七月令・節令の条。「立秋十五日」は、本来「立秋後十五日」に作る。「…止息也」まで。「是七月中也」は、『年浪草』[- 3]の語。

9頁 涼月 [月令] 『礼記』月令篇。

盆秋《経曰》 西晋・竺法護^{しくぼうこ}訳『仏説孟蘭盆經』（全1巻）。ただし文はかなり異なる。『栞草』は『年浪草』[- 3]に拠る。

相月 [爾雅] 『爾雅』釈天。《疏云》『爾雅注疏』北宋・邢昺^{けいへい}の疏（『爾雅注疏』巻5）。

桐秋 [淮南子] 通行の前漢・淮南王劉安撰『淮南子』には見えない。ここは南宋末・陳元靚^{ちんげんせい}撰『歳時広記』巻3、一葉落、明・彭大翼撰『山堂肆考』巻12、時令・一葉落、『潜確居類書』巻5、歳時部・秋（葉落）の条所引などに拠るか。

[遁甲書] 清・陳元龍撰『格致鏡原』巻65、桐の条などに引く。『遁甲書』については、撰者名など未詳。

蘭月、蘭秋、肇秋 [纂要] 『梁元帝纂要』。『初学記』巻3、秋などに引かれる。

[月令広義] 提要抄云 『月令広義』巻14、七月令・名数の条には、「蘭月（提要）」とのみある。『歳時広記』巻3、秋・孟秋月の条には、『提要録』（撰者未詳。宋代の作か）の語として「七月為蘭月」とある。従って提要抄は提要録の誤りであろう。

饒暑《字彙曰》 明・梅膺祚^{ばいようそ}撰『字彙』戌集、饒の条。燕は宴の意。

《説文》 『説文解字』巻5下。

10頁 南呂 [礼記] 『礼記』月令篇（仲秋之月）。《高誘註云》 秦（戦国末）・呂不韋撰『呂氏春秋』「仲秋紀」（仲秋）に見える後漢・高誘注。この異様な取り合わせの記述は、『潜確居類書』巻4、歳時部・曆数（月応律）の条に拠る。高誘注の「陰侶于陽」の訓「陰 陽に侶はれて」は「陰 陽を侶みて」（侶は呂と通じて拒の意）、また「任其成功」は、本来「任成其功」（其の功 [働き] を任成す [成就する]）に作り、このほうが穏当。

白露 [月令広義] 『月令広義』巻15、八月令・節令の条。

秋分 [同上] 『月令広義』巻15、八月令・節令の条。

仲秋 [月令] 『礼記』月令篇。（ただし八月を仲秋と称するが、「八月為仲秋」の語自体はない）

壮月 [纂要] 『梁元帝纂要』。『初学記』巻3、秋などに引かれる。ただし、「中 [仲] 商」まで。「又曰壮月」の語は見えない。（ちなみに『爾雅』月名には、「八月為壮」とある）ここ全体は、『潜確居類書』巻5、歳時部・八月（壮月）の条所引に拠る。

桂月 [同上] 『梁元帝纂要』。ここは『潜確居類書』巻5、歳時部・八月(壮月)の条に拠る。
11頁 難月(読みはナンゲツではなく、ダゲツが穏当) [唐類函] 明・愈安期撰『唐類函』巻7、歳時部二、秋四の条に、「八月...乃難以達秋氣」とある。もともと『礼記』月令篇(仲秋之月)の「天子乃難、以達秋氣」に基づく。この難は「難」と通用。従って難月の読みはナンゲツではなく、ダゲツが穏当であり、「難月の誤にや」と考える必要はない。

雁来月 [月令] 『礼記』月令篇。

無射 [礼記] 『礼記』月令篇。《高誘註云》『呂氏春秋』「季秋紀」(季秋)に見える後漢・高誘註。ここ全体は、『潜確居類書』巻4、歳時部・曆数(月応律)の条に拠る。「無有射出見」の「有」は衍字で、本来「無射出見」に作り、訓も「射出見すること有る無し」ではなく、「出見を射る無し」のほうが妥当。出見は「出現」と同意。

寒露 [月令広義] 『月令広義』巻16、九月令・節令の条。

霜降 [同上] 『月令広義』巻16、九月令・節令の条。「斗指戌...」は「斗指戌...」の誤り。

12頁 季秋 [月令] 『礼記』月令篇。

紅樹《朱熹詩云》南宋・朱熹「苧溪(今の福建省南部の溪流)の道中」詩。「忽憶田野中」は「忽憶野田中」の誤り。(五律の平仄に合わない)『晦庵先生朱文公文集』(四部叢刊)巻1所収。

《韓退之詩云》唐・韓愈(字退之)「和武相公早春聞鶯」(武相公[武元衡]の「早春 鶯を聞く」に和す)詩。「春風紅樹鶯眠処、似妬歌童作艶声」は、本来「春風紅樹鶯眠処、似妬歌童作艶声」の形訛。和刻本『唐韓昌黎集』巻10、『全唐詩』巻344などに収める。ちなみに中国の古典語の「紅樹」は、春の紅い花の咲く樹と、秋の紅葉した樹の両意を持つ。

玄月《范蠡曰》『国語』巻21、越語下。范蠡の語は、「王姑待之」のみ。「至于玄月」は地の文。従って「待之」は「之を待ちて」ではなく、「之を待て」と訓むべし。《註云》三国呉の韋昭注。

菊月 [月令] 『礼記』月令篇。「...黄花」まで。「故曰菊月」は『年浪草』[- 3]の語。馬琴『歳時記』には菊月を「和俗の称する所」と見えるが、南宋末・陳元靓撰『歳時広記』巻3、秋の条に、「提要録曰、九月為菊月」とある。

13頁 曬衣裳 [四民月令] 後漢の崔寔撰『四民月令』。『太平御覽』巻31、七月七日の条所引などに拠る。「俗に習ふこと然り」は、「習俗然り」のほうが穏当。

14頁 [世説] 南朝宋・劉義慶撰『世説新語』(原名は『世説』)排調篇。ほぼ『潜確居類書』巻5、歳時部・七月(曬腹)の条所引に拠る。

15頁 生身魂【盆経】唐・宗密撰『仏説孟蘭盆経疏』巻下。「...患なからしむ」までか。

稲妻 [説文] 『説文解字』巻11下。曜は通常「耀」に作る。

16頁 稲葉の雲《詩云、多稼如雲》通常《詩》といえば、『詩経』(毛詩)のことであるが、「多稼如雲」の句は見えない。唐・王桀に「多稼如雲賦」(『全唐文』巻770)あり。また南宋・陸游の「秋穫後即時」枕上聞雨声詩などにも、「多稼如雲」の語が見える。また『円機活法』巻20、百穀門、禾稼の条に、「詩多稼如雲」とある(掘切注)。「茱草」は『年浪草』[- 14]に拠る。

17頁 蟲蝨 [本綱] 『本草綱目』巻41、蟲蝨の 釈名・集解。「夷人炙てこれを食ふ」は、本来「芒部(雲南省)の夷人これを食ふ」に作る。「辛く毒あり」は 気味 の条。「其類、土中に

こむ 乳む)の前には、本来「蔡邕月令云」の語あり。後漢末・蔡邕撰『月令章句』中の句である。

蝗 [本草綱目] 鳥蟲、集解に云 『本草綱目』巻41、鳥蟲の 集解。「方首」は、正しくは「四角い頭」の意。また「冷氣」は「沴氣」(悪気、不祥の気)の形訛。

18頁 蟪蛄《時珍曰》 『本草綱目』巻39、蝗蝻・桑螵蛸の 積名・集解。

《時珍曰》 『本草綱目』巻39、蝗蝻・桑螵蛸の 積名。

19頁 芋《時珍曰》 『本草綱目』巻27、芋の 集解。

稻 [禹錫食經] 爾雅云、稻稔也 『本草綱目』巻22、稻の 集解 に見える「禹錫曰、爾雅、稻、稔(禹錫曰く、爾雅に稻は稔なり)。この禹錫は『嘉祐補注本草』(嘉祐補注神農本草)の撰者の一人、北宋・掌禹錫を指し、『食經』の撰者崔禹錫ではない。『菜草』は『年浪草』[- 67]の誤りを襲う。ちなみに『爾雅』稔草には、「稔、稻」(稔は稻)とある。

20頁 稻苺 [字彙] 北宋・陳彭年ら撰『(大広益会)玉篇』(巻17、刀部)の誤り。明・梅膺祚撰『字彙』子集、刈の条には、単に「割也」とのみある。『菜草』は『年浪草』[- 68]の誤りを襲う。ちなみに「種也」は「種也」とすべし。ここの種は、穀物を刈る意。

22頁 十六夜月 [蔡氏集伝] 南宋・蔡沈撰『書集伝』巻5、召詰篇。

23頁 稻負鳥 [三才図会] 明・王沂纂集、王思義続集『三才図会』鳥獸1。「頭の下黒く」は、本来「頸の下黒く」に作る。

27頁 隠君子 [范至能菊譜序] 『(新編)古今事文類聚』後集巻29、花卉部・菊花、雑著の条所引に拠る。范至能は南宋・范成大(字致能 [一に至能に作る])。「不改其楽也」は、本来「不改其楽者也」に作る。婉婉は年の暮れゆくさま、腴は豊かさをいう。

【愛蓮説】 北宋・周敦頤(字茂叔)「愛蓮の説」。『古文真宝後集』説類所収。

28頁 色不變松 [荀卿曰] 荀卿は戦国末期の思想家・荀況の尊称。ただしこは、その思想書『荀子』(『荀子』の別称)であろう。清・陳大章撰『詩伝名物集覽』巻11には、「荀卿子、松柏經隆冬而不凋、…」と見えるように、松柏の2字を脱する。通行の『荀子』には見えないが、明・陳耀文撰『天中記』巻51にも見え、典拠を「荀子」と注する。(ただし、貞を真に作る)

30頁 初涼《王劉鑠詩云》 南朝宋・劉鑠の詩。「王」は宋の形訛。『太平御覽』巻25、時序部・秋下の条に見える。

33頁 蓮の実とぶ《蘇頌曰》 北宋・蘇頌ら奉勅撰『図経本草』。『本草綱目』巻33、蓮藕の 修治 所引《頌曰》に拠る。

《山谷詩》 北宋・黄庭堅(号山谷 [道人])の「同錢志仲飯籍田錢孺文官舎」(錢志仲と共に籍田の錢孺文の官舎に飯す)詩。『山谷内集詩注』巻3所収。「…収蓮荀」は「…収蓮的」の誤り。的は葯と通じて、蓮の実をいう。

37頁 初潮 [五雜俎] 明・謝肇淛撰『五雜俎』巻2、天部2。

44頁 榛《時珍曰》 『本草綱目』巻30、榛の 集解。「一の苞に一ツ、実々として櫟の実の如し」の原文は、「一苞一実、実如櫟実」。従って「一の苞に一の実、実は櫟の実の如し」が妥当。また「圏く」は本来「圓く」に作る。圓は円の旧字。

45頁 肌寒 [秋声賦] 北宋・欧陽脩「秋声賦」。『古文真宝後集』賦類所収。「慄冽」は「慄冽」

の形訛。

48頁 星合、星の契 [齋諧記] 『齋諧記』(馬琴『歳時記』)の誤りであろうが、未詳。清・馬國翰撰『玉函山房輯佚書』に収める南朝宋・東陽無疑撰『齋諧記』のなかに、本条未収。類似の内容は、明・陳耀文撰『天中記』巻2、星の条や、『月令広義』巻14、七月令・日次の条には、典拠を「小説」とする。「河西の牽牛を夫に与ふ」は、「河西の牽牛の夫に与ふ」の誤り。夫は男(成年男子の通称)の意。「牽牛の夫」は、『天中記』所引などには「牽牛郎」に作る。小説とは、南朝梁・殷芸撰『小説』を指すか。『菜草』は『年浪草』[- 14]に拠る。

星祭、星の手向 [周処風土記] 吳末・西晋の周処撰『風土記』。『初学記』巻4、七月七日や、『太平御覽』巻31、七月七日などに引かれる。「香粉を河鼓織女に散し」の原文は、「散香粉祀河鼓織女」。従って「香粉を散じ、河鼓織女を祀り」とすべし。「注に云、二星辰…」は、本来「言ふ、此の二星神…」に作る。また「三年にして是をいふ」は、本来「三年にして乃ち之を言ふを得たり」に作る。

50頁 鳳仙花《時珍曰》 『本草綱目』巻17下、鳳仙の 釈名・集解 。『翹然として』は、本来「翹翹然として」に作る。「大指のごとし」は「大きさ指のごとし」の意。

木瓜の子《時珍曰》 『本草綱目』巻30、木瓜の 集解 。

52頁 南瓜《時珍曰》 『本草綱目』巻28、南瓜の 集解 。「苗を生し」は、「苗を生じ」でよいだろう。

56頁 鬼目《時珍曰》 『本草綱目』巻18、白英の 釈名 。

菩提子 [校量類珠功德経] 唐・宝思惟撰『仏説校量数珠功德経』。類は数の誤り。「木患子は千倍なり」は本来「木榧子は福千倍なり」、「浄土に生ぜん」は「浄土に往生せん」、「水精は百万倍なり」は「水精は福万万倍なり」(万万は一万の一万倍、一億)、「無量倍也」は「無量也」に作る。『菜草』は『年浪草』[- 68]に拠る。(ただし書名の類は『菜草』の引用ミス)

58頁 布瓜《時珍曰》 『本草綱目』巻28、糸瓜の 集解 。

59頁 蛇穴に入 [月令] 『礼記』月令篇。「蟄虫坏戸」は「蟄虫坏戸」の形訛。坏戸は「戸を坏く」の意(坏は泥土で隙間をふさぐ。音はハイ)。

60頁 燈籠 [一切経音義] 唐・慧琳撰『一切経音義』巻25。ただし、燈籠を燈爐に作り、「火を盛…」以下のみ見える。『菜草』は『年浪草』[- 9]に拠る。(ただし「居所」を『年浪草』は「所居」[居く所]に作る)

[五雑俎] 『五雑俎』巻2、天部2。「太宗、淳和年中」の原文は、「至淳化間」(淳化の間に至りて)に作る。淳和は淳化(北宋の太宗の年号、990~994)の誤り。『菜草』は馬琴『歳時記』に拠る。

63頁 唐の芋《蘇恭曰》 初唐の『新修本草』(初唐・蘇敬[宋代、避諱のために蘇恭に作る]ら奉勅撰)。『本草綱目』巻27、芋の 集解 所引《恭曰》に拠る。

《時珍曰》 『本草綱目』同条の 集解 所引郭義恭『広志』。郭義恭は晋(以後)の人。

64頁 烏頭《蘇頌曰》 『図経本草』。『本草綱目』巻17、附子の 集解 所引《頌曰》に拠る。

黄蜀葵《時珍曰》 『本草綱目』巻16、黄蜀葵の 集解 。「岐子」は「岐丫」の形訛。(丫は、

ふたまた、音はア)「側金錢花」は「側金蓋花」の誤り。

65頁 木賊刈《禹錫曰》 北宋・掌禹錫ら奉勅撰『嘉祐補注本草』。『本草綱目』巻15、木賊の集解。

《時珍曰》 『本草綱目』同条の集解。

66頁 杼の実《蘇頌曰》 『図経本草』。『本草綱目』巻30、橡実の集解 所引《頌曰》に拠る。「黄色」まで。「栗の花に似たり」は、同条 集解 中の李時珍の語、「如栗花」にもとづく。『菜草』は『年浪草』[- 70] に拠る。

67頁 罌子桐実《時珍曰》 『本草綱目』巻35上、罌子桐の積名。『罌子は...』以下。ちなみに「荏は、...」は、別名「荏桐」の説明。

68頁 中元 [五雑俎] 『五雑俎』巻2、天部2。「三元・三官・大帝」は「三元三官大帝」のほうが妥当であろう。(道教の奉ずる神、上天官大帝・中元地官大帝・下元水官大帝を指す)

69頁 茅【本草に蘇頌云】 『本草綱目』巻13、白茅の集解 所引《頌曰》に拠る。ただし「小兒好て食ふ」を、「亦可噉、甚益小兒」(亦た噉ふべし、甚だ小兒に益す)に作る。「毒なし」以下は、見えない。

重陽 [潜確居類書] 『潜確居類書』巻5、歳時部・九月(重陽)の条。「忽ち復九月九日」は「忽ち復た九月九日」が穏当。「故に宴して高会に享す」の原文は、「故以宴享高会」。従って「故に(以て)宴享・高会す」(宴享で一語。「享宴」と同意)と訓むべきであろう。高会は盛大な宴会を行う意。

71頁 律の調《索隱曰》 唐・司馬貞の『(史記)索隱』。『史記』巻25、律書第三の注に見える『索隱』に拠る。ちなみに単行の『史記索隱』では巻8、律書第三にあたる。「大簇」は「大簇」の形訛。

73頁 鯉魚風 [李賀詩] 唐・李賀「江樓曲」。「門前流水...」に作るのは、『五雑俎』巻1、天部1や、『天中記』巻2、鯉魚風などに引くもの。一般には「樓前流水...」に作る。(和刻本『李長吉歌詩』巻4など)

74頁 鵠【和名抄に唐韻を引けり。中華の書には、怪鳥也...】 『和名類聚抄』羽族類・鵠に引く唐・孫愐撰『唐韻』に「怪鳥也」とあることをいう。

白膠木紅葉《時珍曰》 『本草綱目』巻32、塩麩子の集解。ちなみに五倍子は虫の名。

75頁 踊 [書言故事] 南宋末・胡繼宗の編、明・陳玩直の解『(京本音釈註解)書言故事大全』巻4、雜戲類。『閑覽』(北宋の陳正敏撰『遜齋閑覽』)よりとする。「熙可」は「熙河」(地名)の誤り。『年浪草』[- 10] や馬琴『歳時記』は、「熙可」に誤る。(『歳時記』の「書言古事」も誤り)《注に云》 明・陳玩直の解を指す。

77頁 麻柯の箸《時珍曰》 『本草綱目』巻22、大麻の集解。「輕虚燭心とすべし」は「輕虚にして燭心とすべし」の意。

79頁 旋覆花《蘇頌曰》 『図経本草』。『本草綱目』巻15、旋覆花の集解 所引《頌曰》に拠る。「長さ一二尺、以来...」は「長さ一二尺以来、...」の誤り。以来は、...ほど、ぐらいの意。また「柳葉のごとし」は、本来「葉は柳のごとし」(原文は「葉似柳」)に作る。

- 鬼芒おにすき《時珍曰》 『本草綱目』 卷79、芒ぼうの 集解。「鋒刀」は「鋒刃」の形訛。
- 81頁 車前子おほぼこ [蘇頌図経] 『図経本草』。『本草綱目』 卷16、車前の 集解 所引《頌曰》に拠る。「青色、微赤き実を結ぶ」は、「青色にして微赤く、実を結びて」が穏当。
- 落穂 [詩経] 『詩経』 小雅「大田」。《注云》 南宋・朱熹撰『詩集伝』。
- 82頁 [列子] 戦国・列禦寇撰とされる『列子』天瑞篇。
- 83頁 豺祭獸 [月令] 元・陳皓撰『礼記集説』 卷3、月令篇（季秋之月）の注。『礼記』月令篇の本文ではない。戌月は9月（旧暦）をいう。
- 84頁 老母草おもとの実 [三才図会] 『三才図会』 草木12。「隆々として衰へず」は「隆冬にも衰へず」の誤り。
- 【花鏡】 清初・陳湜ちんこうし撰『花鏡』（秘伝花鏡） 卷5、花草類考・万年青。
- 遅稲おしね、晚稲おくて《時珍曰》 『本草綱目』 卷22、粳この 積名・發明。
- 《時珍曰》 『本草綱目』 卷22、粳の 發明。
- 85頁 早稲わせ《時珍曰》 『本草綱目』 卷22、粳の 發明。
- 87頁 吾亦紅われもこう《陶弘景曰》 南朝梁・陶弘景撰『神農本草經集注』。『本草綱目』 卷12、地榆の 積名 所引《弘景曰》に拠る。
- 91頁 雁来紅《時珍曰》 『本草綱目』 卷15、青葙せいしやうの後に付す「雁来紅」の条。
- 柿《時珍曰》 『本草綱目』 卷30、柿し（柿の本字）の 集解。
- 柿餅かきもち《蔵器曰》 唐・陳蔵器撰『本草拾遺』。『本草綱目』 卷30、柿（柿）に付す柿餅。
- 案山子かがし【芸文類聚云】 初唐・欧陽詢ら撰『芸文類聚』 卷60、弾の条に引く『吳越春秋』（後漢・趙曄しょうよう撰）。ただし、「三皇の世には…殯葬あらず」の部分は見えない。なお『吳越春秋』（四部叢刊）は、卷9、勾踐陰謀外伝に見える。
- 92頁 【伝灯録にいふ】 北宋・道原撰『景德伝灯録』 卷17、洪州雲居道膺うんごどうよう禅師の条。
- 96頁 桂の花 [南方草木状] 西晋・嵇含けいがん撰『南方草木状』を指すのであろうが、通行本には見えない。清初・汪灝おうこう等刪補『佩文齋広群芳譜』 卷40、巖桂の条に引く明・王世懋せいぼう撰『閩部疏』に見える。（「花をひらく」を「盛んに開く」に作る）通行の『閩部疏』（閩 [福建省] の地理風土・物産・風俗などを記す。不分巻）には、『南方草木状』からの引用の語なし。『菜草』は『年浪草』 [- 45]、馬琴『歳時記』に拠る。
- 【本草綱目】 『本草綱目』 卷34、桂・菌桂きんけいの 集解 を合わせて記す。菌桂は菌桂の形訛。また「光沢」は本来「光浄」に作る。『菜草』は『年浪草』 [- 46] に拠る。
- 97頁 薑草かりやす《蘇頌曰》 北宋・蘇頌そしやうら奉勅撰『図経本草』。ただしここは誤りで、『本草綱目』 卷16、薑草の 集解 に引く《恭曰》を指す。これは初唐・蘇敬（宋代、避諱のために蘇恭に作るので注意）ら奉勅撰『新修本草』のこと。「亦円小也」は、本来「莖亦円小也」に作る。脱字である。
- 老鴉瓜からすうり《時珍曰》 『本草綱目』 卷18、王瓜の 積名・集解。
- 籩豆かきまめ《本草》 『本草綱目』 卷24、菹豆へんとうの 積名・集解 にもとづく。
- 98頁 芥菜からしまく蒔《時珍曰》 『本草綱目』 卷26、芥の 集解。
- 鴈 [月令] 『礼記』月令篇（仲秋之月）。「鴻雁来賓」の来は衍字。「来賓」は月令篇（季秋之

月)の語。

《時珍曰》 『本草綱目』 卷47、雁の 集解 。

雁の書 [漢書] 『漢書』 卷54、蘇建伝に付す蘇武伝。「其沢中にあり」は「某沢中にあり」の形訛。

99頁 雁字《山谷詩云》 北宋・黄庭堅(山谷)「虚飄飄」3首(其2)。北宋・秦觀『淮海集』(四部叢刊) 卷3、「和虚飄飄」の注に、魯直(黄庭堅の字)の詩とする。(『全宋詩』 卷1027、黄庭堅49所収)。絳霄は、天空の極めて高いところ。

103頁 榧《時珍曰》 『本草綱目』 卷31、榧実の 積名・集解 。信州玉山懸 信州玉山縣(県)の形訛。信州玉山県は現在の重慶市(旧四川省)。

【羅願爾雅翼云】 南宋初・羅願撰『爾雅翼』 卷10、^ひ椀の条。「文采あり」まで。ただし「木に文采あり」(木有文采)を「材尤も文采あり」(材尤文采)に作る。

橘の実《時珍曰》 『本草綱目』 卷30、^{しよし}櫛子の 集解 。

104頁 雞冠木【本草綱目】 『本草綱目』 卷34、^{かへで}楓香脂の 集解 所引《頌曰》(『図經本草』)。「丹し、^{あか}愛すべし。」まで。

106頁 織女祭 或書が何を指すかは未詳。

《詩經》 『詩經』 小雅「大東」の2句。

《夏小正言》 前漢・戴德撰『大戴礼』 夏小正篇。本来「向東」は「東郷」、「向北」は「北郷」に作る。郷は向かう意であるため、同意となる。

【五雜俎】 明・^{しゅうせつ}謝肇淛撰『五雜俎』 卷2、天部2。「牛女の事、齊諧に始り、武丁の妄言に成り、博物志に成る。槎に乗の浪説、」の原文は、「牛女之事、始於齊諧成武丁之妄言、成於博物志乘槎之浪説。」。従って「牛女の事は、齊諧の成武丁の妄言に始まり、博物志の槎に乗の浪説に成る。」と訓むべし。齊諧は書名。ただし『芸文類聚』 卷4、七月七日の条に、「^{ママ}続齊諧記曰、桂陽城(成)の形訛であろう。叢書集成新編所収の『続齊諧記』には「成」に作る)武丁有仙道、謂其弟曰、七月七日、織女当渡河、…。弟問曰、織女何事渡河。答曰、織女暫詣牽牛。世人至今云、織女嫁牽牛也」とあるのによれば、「齊諧の成武丁」は「続齊諧の成武丁」とすべきであろう。続齊諧は南朝梁・吳均撰『続齊諧記』。(『齊諧記』は南朝宋・東陽無疑撰)。『博物志』は西晋・張華撰。『芸文類聚』 卷94、牛の条や、『太平御覧』 卷8、漢の条所引に拠るか。浪説は、いいかげんな説。『菜草』は『年浪草』 [- 18] の誤りを襲う。

110頁 鷹祭鳥 [月令] 『礼記』 月令篇(孟秋之月)。「鷹乃祭鳥」の部分のみ。「処暑候…」は『年浪草』 [- 55] の語。

112頁 田の色《許慎が説文曰》 後漢・許慎撰『説文解字』 卷7上、禾の条の「嘉穀也。二月始生、八月而孰」を指す。従って「稻」は本来「禾」の字。わかりやすく改変したものか。孰・熟は通ず。

端正月 [昌黎月詩] 唐・韓愈(昌黎は韓愈の郡望)「和崔舍人詠月二十韻」(崔舍人の 月を詠ずるに和す二十韻)。『韓文』(唐・韓愈撰。唐・李漢編。明・游居敬校) 卷9所収。(ただし今宵を「今夜」に作る)

【事文類聚】 南宋・祝穆撰『(新編)古今事文類聚』前集卷11、端正月の条。

竹の春 [竹譜] 北宋・贊寧撰『竹譜』。清・吳景旭撰『歷代詩話』卷55、麦秋の条に、「贊寧竹譜以八月為春、…」とある。

【筍譜】 北宋・贊寧撰『筍譜』。ここは、『月令広義』卷15、八月令・物候、竹小春の条所引による。

113頁 煙草花 [花鏡] 清初・陳淏子撰『花鏡』卷5、花草類考、烟花の条。「初て海外に出づ」は、「初め海外に出づ」のほうが穩当。「漳泉」は「漳・泉」。漳州と泉州。現在の福建省に属する。「木、春不老に似て」、「本(もともと)春不老に似て」の形訛。

114頁 種茄子《時珍曰》 『本草綱目』卷28、茄の 集解。

茸狩 [爾雅] 『爾雅』釈草篇の、「中馗は菌」の条に対する東晋・郭璞の注。「蓋に似たり」まで。ただし「形」の字はない。

115頁 太刀魚《時珍曰》 『本草綱目』卷44、鱧魚の 集解・釈名。「物を割裂箴刀の如し」の原文は、「如割物裂箴之刀」。従って「物を割り箴を裂くの刀の如し」と訓むべし。済は切断する、箴は竹皮の意。「鱧魚」は「鱧魚」の形訛。

118頁 荔枝《時珍曰》 『本草綱目』卷28、苦瓜の 釈名・集解。「荔枝殼」は「荔枝殼」の形訛。「痲癩」は「痲癩」の形訛。

120頁 爽氣 [増韻] 南宋初の毛晃・毛居正撰『増修互注礼部韻略』卷3、爽の条。「清快なり」まで。(下冊7頁に前出)

【蔡松年詩】 金・蔡松年「大江東去」2首(其2)。元好問編『中州集』に付す『中州樂府』所収。樂府はいわゆる詞。従って蔡松年詩は、蔡松年詞のほうが穩当。

蕎麦の花《時珍曰》 『本草綱目』卷22、蕎麦の 釈名・集解。菽のルビ「しう」は、「けう」に訂正すべし。

123頁 露 [月令章句] 後漢末・蔡邕撰『月令章句』。『太平御覽』卷12、露や、北宋・吳淑撰・注『事類賦』卷3、露の条所引などに拠る。「結びて」は本来、「凝りて」に作る。

月 [物理論] 西晋・楊泉撰『物理論』。『潜確居類書』卷1、玄象部・月(水精)や、明・陳耀文撰『天中記』卷1、月の条所引に拠るか。

【説文】 未詳。通行の『説文解字』には見えない。「哉生明」「哉生魄」の哉は、始(始めて)の意。この両語は見えないが、そのほかは、『潜確居類書』卷1、玄象部・月(稟日光)の条に引く周髀の説に見える。「菜草」は『年浪草』[- 35]に拠る。(四時堂其諺『増訂滑稽雜談』卷15、月の条にも見える)

124頁 月の霜、月の雪《杜甫仲秋詩云》 唐・杜甫「八月十五夜月」2首(其1)。『杜詩詳注』卷20などに収める。「満月」は「満目」、「太刀」は「大刀」の形訛。また「玉兔」は一般に「白兔」に作る。すでに堀切注に指摘。『菜草』は『年浪草』[- 35]に拠る。ただし『年浪草』は正しく「大刀」「白兔」に作る。

月の桂の花紅葉 [酉陽雜俎] 晚唐・段成式撰『酉陽雜俎』卷1、天咫。

月の桂の子 [蘇詩注] 清・陳元龍撰『格致鏡原』卷72、桂花の条に、「坡詩注」として見える

もの。坡詩を蘇東坡（名は軾）の詩と解釈したものであろう。蘇軾の「天竺詩」詩注には見えない。

【本草図経】 『本草綱目』巻34、月桂の 集解 所引「葳器曰」に拠る。従って【本草図経】（北宋・蘇頌ら奉勅撰『図経本草』）は、【本草拾遺】（唐・陳蔵器撰）の誤り。「桂の子」は「月桂の子」が正しい。

125頁 月の鼠 [仙説譬喻経] 唐・義浄訳『仏説譬喻経』（全1巻）。「乃至樹根」は、本来「陰岸樹根」に作る。『菜草』は『年浪草』[- 40] や馬琴『歳時記』に拠る。

【楼炭経】 未詳。西晋・法炬訳『大楼炭経』6巻には見あたらない。

月の都 [太平広記] 『太平広記』巻22（神仙22）、羅光遠の条。「神仙感遇伝及び仙伝拾遺・逸史等の書に出づ」とある。『神仙感遇伝』と『仙伝拾遺』は、ともに唐末・五代の杜光庭撰、『逸史』は唐・盧肇撰である。「拄杖」は「拄杖」の形訛。「約するに、行こと数千里」は、「約ぼ行こと数千里」であろう。

126頁 「素練霓裳にして」は、本来「素練霓衣にして」に作る。また「広庭に舞ふを」は、「広庭に舞ふを見る」の脱字であろう。

月の蟾、月の兎 [五経通義] 前漢末・劉向撰『五経通義』。『芸文類聚』巻1、月や、『太平御覧』巻4、月の条所引などに拠る。「兔と蟾とある」は、本来「兔と蟾蜍とある」に作る。『菜草』は「蝮」字のない『年浪草』[- 37] に拠る。

《杜甫詩云》 杜甫「月」詩。『集千家註杜工部詩集』巻3など所収。

《白居易詩云》 白居易「中秋月」。『白氏文集』巻16所収。「照地幾許人腸断、金蟾玉兔遠不知」は、本来「照他幾許人腸断、玉兔銀蟾遠不知」に作る。上句の訓は、「幾許（幾許）をか照他して人腸断たん」。照他の他は、動詞の後に添えられた助字。ちなみに『菜草』の直接の典拠、『年浪草』[- 37] には、「照他幾許人腸断、玉兔金蟾遠不知」に作る。『菜草』の引用ミスもある。

月の蝕 [天経或問] 清・游藝撰『天経或問』前集巻2、日食の条。「日は月天の上にあり」は、本来「日の行く所は月天の上にあり」、「月は日天の下にあり」は、「月の行く所は日天の下にあり」に作る。「朔日月行こと日天の下に在て、日の光を掩ふ」の部分、原文と大きく異なる。また「日光なきが如し」は、「日 光なきが如し」の意。「寔に常を失はざる也」の原文は、「寔未常失光也」。従って少なくとも「寔に常には光を失はざる也」と訓むべし。（寔 [實] と寔は通用）また「一向八十度」は、「月距日（月 日を距つること）一百八十度」に作る。「日月望む。中間に正対するとき、地球障隔す」の原文は、「日月正対望。中間地球障隔」。従って「日月正対して望む。中間の地球障隔す」と訓むべし。「燿さず」は、「之を照らす能はず」に作る。

127頁 月の出潮 [性理大全] 明・胡広ら奉勅撰『性理大全』巻27、天文「地理（潮汐附）」の注。余襄公安道は、北宋の余靖（1000～1064、字は安道、諡は襄）。その「海潮図序」の語である。（『（新編）古今事文類聚』前集巻15、潮・雑著の条所収）

128頁 鳶《時珍曰》 『本草綱目』巻37、松蘿の 集解 の条に引く北宋・陸佃撰『埤雅』。

【本綱】 『本草綱目』巻18下、烏斂莓の 集解・積名。「一枝一鬢」は本来「一枝一鬚」。「烏斂と名づく」は「烏斂と名づく」の誤り。ここまでが『本草綱目』。

129頁 甘藷【鎮江府志】 明・王忞麟修、明・王樵纂『重修鎮江府志』巻30、物産志、菜属・

山藥の条。

131頁 月見 [事文類聚] 『(新編)古今事文類聚』前集卷11、天時部・八月の条。歐陽詹(758?~801?)は中唐の人、字は行周。彼の「翫月詩序」は、北宋・姚鉉編『唐文粹』巻96、『全唐詩』巻349などにも収める。「八月於秋季始孟終」を「八月の秋に於ける 季の始め孟の終り」と訓むのは誤り。下部は、旧暦8月が秋3ヶ月の中間にあることを言い、始は7月、終は9月を指す。「始め(7月)より季れ 終り(9月)より孟だつ」の意。前の句「秋之於時後夏先冬」(秋の時に於ける 夏に後れ冬に先だつ)と対句をなし、季は後、孟は先の意にあたる。「埃壙不流」を「埃壙として流れず」と訓むのも誤読。埃壙あゐあゐは土ほこり、塵土の意。「蟬娟徘徊、博華上浮」は「蟬娟徘徊、桂華上浮」のほうが穏当。蟬娟・桂華はいずれも月の美称である。また「西林」は「西樓」、「肌膚与之疎冷(涼)、神氣与之清冷」の与之を、「之と与に」と訓むが、「之が与に」と訓むべし。『菜草』の文字・訓読は、『年浪草』[- 13]に拠る。

132頁 《白楽天詩》 白居易「八月十五(日)夜、禁中独直、对月憶元九」。『白氏文集』巻14所収。

[五雜俎] 『五雜俎』巻2、天部2。「必」は、ここでは「必ずしも」の意。「旁照数十丈」は「旁く照らすこと数十丈」の意。また「臨川吳比部あそび擣謙」は、比部は官名。臨川(今の江西省)出身の吳擣謙のこと。

月草、露草《時珍曰》 『本草綱目』巻16、鴨跖草おうせきそうの 積名・集解。碧蟬花は、碧蟬花の形訛。

133頁 燕帰る [格物総論] 『古今合璧事類備要』別集巻73、燕の条の格物総論。

136頁 七箇池 [事林広記] 南宋末・元初、陳元靚ちんげんせい撰『事林広記』。和刻本『新編群書類要事林広記』には見あたらないが、この話は東晋・葛洪かつこう撰『西京雜記』巻3(巻上、また『類説』巻4所収の『西京雜記』)に見える。「百子の池」は、前漢の都長安の宮殿内にあった池の名「百子池」。また「五纒」は「五色纒」の誤り。『菜草』は『年浪草』[- 20]の誤りを襲う。(『増訂滑稽雑談』巻13、七箇池の条にも見える)ちなみに戚夫人は、前漢の高祖劉邦の寵姫(?~前194)。また相憐愛は、相連愛、相連受(綬)にも作る。馬琴『歳時記』は『西京雜記』を引く。

刀豆かたまめ《時珍曰》 『本草綱目』巻24、刀豆の 積名・集解。集解の「五六月紫花をひらく」は、本来「五六七月紫花をひらく」に作る。

【段成式、酉陽雜俎に云】 唐・段成式撰『酉陽雜俎』巻19、草篇。

137頁 棗の実《時珍曰》 『本草綱目』巻29、棗の 積名。

【陸佃埤雅云】 北宋・陸佃りくてん撰『埤雅』。ただし現行本には見えない。

梨子なし《時珍曰》 『本草綱目』巻30、梨の 積名。「高さ三四尺」は「高さ三四丈」、「細き葉あり」は「細き齒あり」の誤り。

140頁 南天の実《蘇頌曰》 北宋・蘇頌そしやうら奉勅撰『図経本草』。ただしこれは誤りで、『本草綱目』巻36、南燭の 集解 に引く《蔵器曰》、つまり唐・陳蔵器撰『本草拾遺』の語。

[補注]

『年浪草』（『華実年浪草』）は、尾形仵・小林祥次郎共編『近世後期歳時記本文集成並びに総合索引』（勉誠社、1984年）に収める影印本を使用し、[- 52]などは索引用に付された同書の番号である。ちなみに馬琴撰『歳時記』（『俳諧歳時記』）も、同書所収の影印本を用いた。

また『増訂滑稽雑談』は、「東京帝国大学珍藏の朱書入本を底本とし、図書館本を参じ厳密に訂して刊行す」という伊藤蓼衣増訂本（国書刊行会、1917年）を影印した、ゆまに書房本（1963年刊）を用いた。